

原 著

介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係

—— 介護福祉士養成制度発足以来の卒業生を対象とした調査を通して ——

橋本勇人¹⁾ 別惣淳二²⁾ 豊山大和³⁾

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻¹⁾

兵庫教育大学 学校教育研究センター²⁾

神戸女子大学 文学部 社会福祉学科³⁾

(平成10年11月11日受理)

The Relationship between Professional Training for Certified Care Workers and Welfare Volunteer Activities

Hayato HASHIMOTO¹⁾, Junji BESSO²⁾ and Hirokazu TOYAMA³⁾

1) *Doctoral Program in Medical Social Work
Graduate School of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan*

2) *Center for School Education Research
Hyogo University of Teacher Education
Yashiro, 673-1421, Japan*

3) *Department of Social Welfare
Faculty of Literature
Kobe Women's University
Kobe, 654-0018, Japan
(Accepted Nov. 11, 1998)*

Key words : welfare volunteer activities,
professional training for certified care workers, volunteer coordinator

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the relationship between professional training for certified care workers and welfare volunteer activities. Questionnaires were sent to graduates from a training school for certified care workers. To analyze the data, we divided the graduates into three groups. The first group consisted of graduates who felt that welfare volunteer activities which they experienced at training school were useful (useful group), a second group consisted of graduates who had neutral feelings (neutral

group), and a third group consisted of graduates who felt the experience was useless (useless group).

As a result, we found there are two relevant relationships between professional training for certified care workers and welfare volunteer activities. One is the influence of welfare volunteer activities on professional training for certified care workers, and the other is the influence of training for certified care workers on welfare volunteer activities. In the former case, it was found that the useful group thought that volunteer activities served a professional education function but not a liberal arts function. In the latter case, it was found that graduates in the useful group exhibited positive images, appropriate attitudes and a greater tolerance toward volunteers at their institutions.

要 約

本研究の目的は、介護福祉士養成学校の卒業生を対象とした質問紙調査の結果を通じて、介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係を明らかにすることである。そのため、学生時代の福祉に関するボランティア活動が、役に立ったという有効群、どちらともいえないという中間群、役に立たなかったという無効群に分けて分析した。

その結果、介護福祉士養成と福祉ボランティアには、ボランティアが介護福祉士養成に及ぼす影響と、介護福祉士養成が福祉ボランティアに及ぼす影響という双方向の関係があった。前者の場合には、有効群では、福祉ボランティアは、介護福祉士養成カリキュラムの中で、一般教養教科目というよりも専門科目としての機能を果たしていた。また、後者の場合には、有効群では、卒業生が自分たちの施設でボランティアを受けれるときの、ボランティアに対する対応、イメージ、寛容性に影響を及ぼしていることがわかった。

はじめに

本研究の目的は、介護福祉士養成校の卒業生を対象とした質問紙調査の結果を通じて、介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係を明らかにすることである。

近年の急激な少子・高齢社会を迎え、ボランティア養成の必要性については、いくつかの重要な提言がなされている*1。しかし、福祉に関係するボランティア（以下、福祉ボランティアと呼ぶ）の現場において活躍が期待されている介護福祉士の養成と福祉ボランティアの関係についての研究は、ほとんどなされていない。

ところで、福祉専門職養成（介護福祉士養成を含む）と福祉ボランティアとの関係は大きく分けて2つある。1つは、福祉ボランティアが福祉専門職養成に及ぼす影響であり*2、もう1つは、その養成校を卒業した者が福祉ボランティアとして期待される役割である。後者は、その

養成校を卒業した者が、福祉専門職としての専門性を生かして、福祉ボランティアの現場で指導的な役割を果たすことが期待されていることと、将来就職した施設等でボランティアの受け入れ側にまわるという特殊性（施設等におけるボランティア・コーディネーターとしての役割）がある*3。

このように、福祉ボランティアに関して福祉専門職に寄せられている期待の大きさにもかかわらず、現在まで両者の関係についてほとんど研究がなされてこなかった理由としては、以下のことが考えられる。第1に、福祉の分野では、ボランティアをすることは当然のことと考えられ、特に議論されることがなかったことがあげられる。第2に、福祉専門職養成のカリキュラムにおいて、福祉ボランティアと関連する内容が各科目に分散しており、福祉ボランティアの位置づけがはっきりしなかったことがあげられる。また、あまりに急激な少子・高齢化の進展

に福祉専門職養成のカリキュラムが追いつかなかったことなどがあげられよう。さらに、介護福祉士養成に関しては、法律制定から10年余しか経っていないという特殊性もある。

そこで、本研究では、介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係を明らかにするため、介護福祉士養成制度発足以来の養成校であるA介護福祉士養成校の卒業生508名を対象に実施した福祉ボランティアに関する質問紙調査の結果を中心に若干の考察を行なう。

研究の方法

1 調査方法

本研究は、A介護福祉士養成校の卒業生（平成元年度卒～平成8年度卒）508名を対象に実施した「福祉ボランティアに関する調査」（質問紙調査）から得られた結果に基づいている*4。なお、本調査は、平成9年12月20日～31日にかけて郵

送質問紙法により無記名で行なったものである。有効回答数は122（有効回答率：24.0%）であった。

2 研究の枠組み

本研究の対象である当該養成校122名の卒業生のフェースシート（表1）に示すように、卒業生のうち91名（74.6%）が何らかのかたちで福祉ボランティアへの参加経験がある*5。その91名（74.6%）の卒業生に対して、「介護福祉職として働いていく上で、養成校在学中に参加した福祉に関するボランティアの経験が役に立ちましたか」という質問を設定し、回答を求めた。その結果を示したものが表2である。

表2より、54名（59.3%）の卒業生が程度の差はあれ「役に立った」と感じており、逆に11名（12.1%）の卒業生が「役に立たなかった」と感じている。この福祉の現場で勤務している卒業生が在学中に体験した福祉ボランティアが

表1 フェース・シート

卒業年度	元年度卒	2年度卒	3年度卒	4年度卒	5年度卒	6年度卒	7年度卒	8年度卒	無答		
	N	9	12	12	7	15	17	24	24	2	
%	7.4	9.8	9.8	5.7	12.3	13.9	19.7	19.7	1.6		
勤務場所	特別養護老人ホーム	老人保険施設	病院	デイケアセンター	その他	無答	職名	寮母	生活指導員	その他	無答
	N	50	44	4	4	19		1	102	7	10
%	41.0	36.1	3.3	3.3	15.6	0.8	%	83.6	5.7	8.2	2.5
勤務年数	1年未満		1～2年未満		2～3年未満		3～5年未満		5年以上		無答
	N	20	39	19	16	23	5				
%	16.4	32.0	15.6	13.1	18.9	4.1					
福祉ボランティア参加経験	参加なし	学校からの勧めで参加	自分から時々参加	自分からよく参加	無答		総計				
	N	28	10	63	18	3	122				
%	23.0	8.2	51.6	14.8	2.5	100.0					

表2 介護職における福祉ボランティアへの参加経験の有効性

	役に立たなかった	あまり役に立たなかった	どちらともいえない	少し役に立った	役に立った	合計
N	5	6	26	21	33	91
%	5.5	6.6	28.6	23.1	36.2	100.0

「役に立った」、あるいは「役に立っていない」という感覚は、介護福祉士養成のみならず、ボランティア養成にとっても重要な要素となる。なぜなら、在学中における福祉ボランティアの原体験の良し悪しが、介護福祉士養成カリキュラムにおける理論と実践を結び付ける上でも、また、卒業後の福祉ボランティアへの参加意欲や、実際にボランティアを受け入れる立場になった時にボランティア側の気持ちを大切にしながらボランティアを受け入れられる資質・能力を形成する上でも、大いに関係してくると考えられるからである。

そこで、本研究の目的に鑑み(図1参照)、表2の福祉ボランティアへの参加経験の有効性に関する結果から、「役に立った」「少し役に立った」という有効群(N=54)と「どちらともい

えない」という中間群(N=26)と「役に立たなかった」「あまり役に立たなかった」という無効群(N=11)の3群に分類し、本研究の分析軸とした。(文責：橋本勇人)

結果および考察

1 福祉ボランティアが介護福祉士養成に及ぼす影響

(1) 介護福祉士養成における福祉ボランティアの教育的意義

まず、卒業生は、在学中に参加した福祉ボランティアの経験がどのように役立ったと感じているのであろうか。表3は、8項目の教育的意義について5段階尺度で回答してもらい、その結果を無効群・中間群・有効群で示したものである。

表3より、上位5項目、すなわち、「老人、障害者の方たちについて知り、色々なことを学べる機会を持てる」「優しさ、思いやりなど人間性を培うことに役立つ」「人間的に幅ができ、視野が広がる」「対人援助、介護の仕方について学べる」「多くの福祉職の人たちを知り、色々なことを学べる機会を持てる」では、すべての群で3以上の平均得点が得られている。

また、3つの群の各データに対して分散分析を施した結果、「老人、障害者の方たちについて知り、色々なことを学べる機会を持てる」「対人

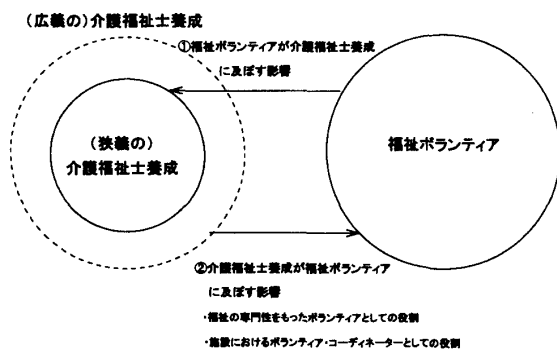


図1 介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係

表3 福祉ボランティアの教育的意義

	全体 (N=91)	I 無効群 (N=11)	II 中間群 (N=26)	III 有効群 (N=54)	F値	多重比較		
	Mean (S.D.)	Mean (S.D.)	Mean (S.D.)	Mean (S.D.)		I-II	II-III	I-III
老人、障害者の方たちについて知り、色々なことを学べる機会を持てる	4.54(0.78)	4.00(1.35)	4.35(0.78)	4.75(0.47)	6.04**	*	**	**
優しさ、思いやりなど人間性を培うことに役立つ	4.29(0.87)	3.73(1.21)	4.12(0.89)	4.49(0.69)	4.49*			**
人間的に幅ができ、視野が広がる	4.13(0.93)	3.73(1.14)	4.00(0.96)	4.28(0.83)	2.01			
対人援助、介護の仕方について学べる	4.05(1.01)	3.09(0.90)	3.73(0.98)	4.41(0.85)	11.84**		**	**
多くの福祉職の人たちを知り、色々なことを学べる機会を持てる	3.98(1.09)	3.36(1.37)	3.65(1.07)	4.27(0.92)	5.13**		*	*
施設でボランティアを受け入れる時、ボランティアの気持ちがかかる	3.59(1.12)	2.55(1.23)	3.60(1.13)	3.81(0.96)	6.35**	**		**
ボランティアを受け入れる場合の問題点が理解できる	3.28(1.05)	2.55(1.16)	3.04(0.90)	3.55(1.00)	5.50**		*	**
障害者福祉、老人福祉などについての行政・制度について学べる	2.64(1.13)	2.45(1.16)	2.31(0.77)	2.85(1.22)	2.22			

(注1) Mean は、5段階尺度(1役に立たなかった、2あまり役に立たなかった、3どちらともいえない、4少し役に立った、5役に立った)から得られた回答の平均得点を示す。

(注2) 一元配置分散分析法ならびに多重比較法(Ryan法)による検定結果については、 $p < 0.05$ …*, $p < 0.01$ …**を付した。

(注3) 各項目の配列は、全体の平均値(Mean)の高い順に整理し直した。

(注4) 無答は、除いて処理した。

援助, 介護の仕方について学べる」「多くの福祉職の人たちを知り, 色々なことを学べる機会を持てる」「施設でボランティアを受け入れる時, ボランティアの気持ち分かる」「ボランティアを受け入れる場合の問題点が理解できる」では, 1%水準で有意差が認められた。また, 「優しさ, 思いやりなど人間性を培うことに役立つ」でも 5%水準で有意差が認められた。さらに, これらの項目について多重比較を行ったところ, いずれの項目も有効群の平均値が最も高く, 各群との間に有意差が認められた。

これらの結果から, 福祉ボランティアは介護福祉士としての資質・素養や技術・能力を身につける上で役に立っているだけでなく, 有効群については, 将来, ボランティアを受け入れる側にまわった場合に必要な素養や能力を形成する上でも役に立っていることが分かる。

(2) 介護福祉士養成カリキュラムにおけるボランティアの位置づけ

では, 卒業生にとって, 福祉ボランティアは, 介護福祉士養成カリキュラムにおいてどのような位置にあるのだろうか。ここでは, 介護福祉士養成カリキュラムで必要とされている16科目に福祉ボランティアを加えた17科目について, 重要と思われる順に優先順位をつけてもらった。そして, 上位5つについて, 1位5点, 2位4点, 3位3点, 4位2点, 5位1点というように換算し, 各科目ごとに累積得点(ここではW(Weight)得点と呼ぶ)を算出した。その結果は, 表4に示すとおりである。

表4に示すように, 全体傾向としては, 「介護実習」や「介護技術」の重要度が最も高く, 続いて「障害形態別介護技術」「レクリエーション指導法」「医学一般」「老人・障害者の心理」という順となり, 「福祉ボランティア」は7位と中

表4 介護福祉士養成カリキュラムにおける福祉ボランティアの位置づけ

科目名	W 得点			
	全体 (N=86)	I 無効群 (N=11)	II 中間群 (N=26)	III 有効群 (N=49)
介護実習	240	25	55	160
介護技術	233	25	67	141
障害形態別介護技術	115	12	22	81
レクリエーション指導法	103	11	32	60
医学一般	97	22	26	49
老人・障害者の心理	69	5	24	40
福祉ボランティア	66(7位)	7(9位)	1(17位)	58(5位)
精神衛生	62	21	10	31
介護概論	58	2	25	31
リハビリテーション論	35	6	11	18
社会福祉援助技術	31	10	7	14
栄養・調理	30	9	6	15
老人福祉論	26	0	22	4
社会福祉概論	24	5	9	10
障害者福祉論	22	0	11	11
家政学概論	21	4	4	13
一般教養科目	12	0	8	4

(注1) W得点は, 重みづけ得点を意味し, 介護福祉養成で必要となる16科目に福祉ボランティアを加えた17科目について優先順位を付けてもらい, 1位-5点, 2位-4点, 3位-3点, 4位-2点, 5位-1点として換算し, 累積得点を算出したものである。

各項目の配列は, 全体のW得点の多い順に整理した。

表5 介護福祉養成カリキュラムに「ボランティアに関する科目」を導入する場合の賛否

(%)

	反対である	どちらかといえば 反対である	どちらとも いえない	どちらかといえば 賛成である	賛成である	合計
I 無効群	0.0	9.1	54.6	18.2	18.2	11
II 中間群	0.0	3.9	26.9	46.2	23.1	26
III 有効群	5.6	1.9	20.4	35.2	37.0	54
全 体	3.3	3.3	26.4	36.3	30.8	91

 $\chi^2=11.06$ df=8 N.S.

ほどに位置する。つまり、福祉ボランティアは、一般教養科目というよりもむしろ、介護の実践に近い専門科目というかたちで位置づけられている。しかし、福祉ボランティアの位置づけは、無効群と有効群とは異なる。無効群では9位であるのに対し、有効群では5位と重要度が高く、専門科目の中でも、「介護実習」や「介護技術」の次のグループに位置づいている。

(3) 介護福祉士養成に「ボランティアに関する科目」を採り入れることの賛否

このように介護福祉士養成において一定の教育的意義が認められ、かつ専門科目としても位置づけることが可能な福祉ボランティアであるが、もし仮に現行の介護福祉士養成カリキュラムの中に「ボランティアに関する科目」*を採り入れるならば、卒業生はどのような考えを抱くであろうか。そこで、「ボランティアに関する科目」を養成カリキュラムに採り入れることの賛否を5段階尺度で尋ねた結果を示したものが表5である。

表5で示すように、「賛成である」「どちらかといえば賛成である」のいずれかに回答した導入賛成者は67.1%である。また、無効群と有効群との差に注目すると、統計的に有意な差は認められないものの、有効群は72.2%の者が賛成していることから、無効群よりもはるかに有効群の方が導入に肯定的である。

また、そのカリキュラムに「ボランティアに関する科目」を採り入れるとなると、それを必修科目とすべきか選択科目とすべきかが問題となる。表6は、先の表5で「賛成である」「どちらかといえば賛成である」と答えた者のみに対して、いずれの科目にするべきかについて尋ね

表6 「ボランティアに関する科目」の取扱い

(%)

	必修科目	選択科目	合計
I 無効群	50.0	50.0	4
II 中間群	22.2	77.8	18
III 有効群	39.5	60.5	38
全 体	35.0	65.0	60

表7 ボランティア活動の4原則 (N=89)

	W 得点			
	自発性	社会性	無償性	先駆性
I 無効群	44	28	18	20
II 中間群	87	58	49	45
III 有効群	200	152	104	84
全 体	331	238	171	149

(注) W得点は、重みづけ得点を意味し、1位-4点、2位-3点、3位-2点、4位-1点として換算し、累積得点を算出したものである。

た結果を示したものである。

表6から、全体としては、「必修科目」と答えた者が35.0%であり、「選択科目」と答えた者が65.0%であった。先の表5の結果では、有効群は「ボランティアに関する科目」の導入に対して72.2%の者が肯定的であったが、その有効群でも「必修科目」よりも「選択科目」とすべきであるという意見が約6割を占める。この原因としては、授業でボランティア活動を行なう場合に不可避となる「強制」の要素と、ボランティア活動本来の「自発性」の原則とが影響しあ

っているのではないかと推察される⁴⁾。というのも、表7に示すとおり、ボランティア活動をする上で「自発性」の原理が最も重要であるという結果が得られたからである。このことから、「ボランティアに関する科目」を介護福祉士養成カリキュラムに採り入れる必要性は認めつつも、「選択科目」とすることでボランティア活動のもつ「自発性」の原則と調整を図ろうとする姿勢がうかがえる。

(4) 「ボランティアに関する科目」におけるボランティア活動の取り扱い

さらに、「ボランティアに関する科目」を仮に選択科目として採り入れるとしても、その科目の中のボランティア活動（体験）の扱いが問題になる。そこで、ボランティア活動（体験）をどのように取り扱うかについて尋ね、その結果を示したものが表8である。

表8から、全体的に見れば「ボランティア活動を採り入れる」34.4%、「情報提供のみ」24.4%、「自主性に任せる」41.1%となり、自発性の原則の影響が強く表れる。なお、有効群と無効群とを比べた場合、無効群より有効群の方が「ボランティア活動（体験）」を採り入れることについて、やや賛成する傾向がみられる。このことから、授業でボランティア活動（体験）を採り入れる場合、「強制」の要素とボランティアの「自発性」の原則の調整の他に、ボランティアに関する有効感覚の違いも影響してくることがわかる。

(5) ボランティア活動（体験）に対する評価のあり方

上記の微妙な問題を克服するためには、科目として採り入れたボランティア活動をどのように評価すべきであるかを考える必要がある。表

表8 「ボランティアに関する科目」におけるボランティア活動の取り扱い

(%)

	ボランティア活動を採り入れる	情報提供のみ	自主性に任せる	合計
I 無効群	27.3	27.3	45.5	11
II 中間群	26.9	26.9	46.2	26
III 有効群	39.6	22.6	37.7	53
全 体	34.4	24.4	41.4	90

表9 ボランティア活動の評価

	全 体	I 無効群	II 中間群	III 有効群	F 値	多重比較		
	(N=83) Mean(S.D.)	(N=11) Mean(S.D.)	(N=26) Mean(S.D.)	(N=46) Mean(S.D.)		I-II	II-III	I-III
〈誰が評価を行うのか〉								
教員	2.05(1.00)	1.91(1.24)	2.16(0.97)	2.02(0.94)	0.27			
ボランティア学生自身	3.48(1.31)	2.82(1.64)	3.48(1.10)	3.63(1.27)	1.72			
ボランティア受け入れ施設	3.66(1.18)	3.64(1.43)	3.44(1.10)	3.78(1.14)	0.67			
教員、学生、施設の3者	3.95(1.19)	3.45(1.16)	3.85(1.23)	4.13(1.13)	1.59			
〈何を評価するのか〉								
ボランティアの内容や種類	2.40(1.22)	2.27(1.14)	2.20(1.10)	2.53(1.29)	0.65			
ボランティアの実施回数（時間）	2.10(1.04)	2.09(1.08)	2.12(0.95)	2.09(1.08)	0.01			
学生個人の意識の変化	4.09(1.08)	3.27(1.14)	4.36(0.89)	4.14(1.07)	4.24*	**		*
評価すべきではない	3.35(1.32)	3.55(1.44)	3.23(1.25)	3.37(1.32)	0.22			

(注1) Mean は、5段階尺度（1 そう思わない、2 あまりそう思わない、3 どちらともいえない、4 少しそう思う、5 そう思う）から得られた回答の平均得点を示す。

(注2) 一元配置分散分析法ならびに多重比較法（Ryan 法）による検定結果については、 $p < 0.05 \dots *$ 、 $p < 0.01 \dots **$ を付した。

(注3) 無答は、除いて処理した。

9は、ボランティア活動の評価に関する項目について5段階尺度で回答してもらった結果を示したものである。

「誰が評価を行なうべきか」に関しては、全体では、「教員・学生・施設の3者が評価すべきである」という項目の平均得点が最も高かった。この項目について、有効群と無効群とを比較すると、統計的に有意差は認められないが、有効群の4.13という平均得点の高さは注目するに値する。

次に、「何を評価すべきか」に関しては、全体では、「ボランティアの意識の変化」という項目の平均得点が最も高く、分散分析及び多重比較の結果に示すとおり、無効群よりも有効群の方がそれに賛成する傾向が強い。

以上の結果から、評価者は「教員・学生・施設の3者評価」という多面的評価であり、評価内容は、学生の意識の変化で評価すべきであるという意見が最も多い。この回答には、卒業生の福祉ボランティアに対する有効感覚が強く影響していると思われるが、「ボランティアに関する科目」が、①選択科目であること、②評価者として学生も加わり、自己のボランティア学習の成果を評価に反映させることができること、という条件を満たせば、授業という「強制」の枠の中にあっても、ボランティア活動に参加する方が将来的には良いという考えが背後にあるように思われる。

(6) ボランティア活動(体験)歴を入試や就職で評価することについて

次に、科目の評価とは異なるが、ボランティア活動歴を入試や就職で評価することの賛否を5段階尺度(反対である、どちらかといえば反対である、どちらともいえない、どちらかといえば賛成である、賛成である)で尋ねた結果を示したものが表10である。

対である、どちらともいえない、どちらかといえば賛成である)で尋ねた結果を示したものが表10である。

全体的には、「どちらともいえない」という回答が最も多く、意見が分かれる。ただし、有効群と無効群とを比較した場合、有意差は認められないものの、有効群の方がどちらかといえば「賛成」という意見に傾斜し、逆に無効群の方が「反対」という意見に傾斜している様子が読み取れる。(文責:別惣淳二)

2 介護福祉士養成が福祉ボランティアに及ぼす影響

介護福祉士養成を修了して現場で活躍する介護福祉士には、福祉ボランティアに関して2つの特殊性があると考えられる。1つは、福祉ボランティアの現場では、介護福祉士が専門職ボランティアとして中心的な役割を果たすことである。2つは、就職先の介護施設等でボランティア・コーディネーターとしての役割を期待されるということである。以下では、養成校在学中に経験した福祉ボランティアの有効感覚が、これら2つの役割を果たす上で及ぼす影響度について分析を進めていくことにする。

表11 現在の福祉ボランティアの参加状況

(%)

	参加なし	時々参加	よく参加	合計
I 無効群	100.0	0.0	0.0	11
II 中間群	80.8	19.2	0.0	26
III 有効群	77.8	14.8	7.4	54
全 体	81.3	14.3	4.4	91

表10 ボランティア活動歴を入試や就職で評価することについての賛否

(%)

	反対である	どちらかといえば反対である	どちらともいえない	どちらかといえば賛成である	賛成である	合計
I 無効群	27.3	45.5	27.3	0.0	0.0	11
II 中間群	7.7	11.5	50.0	23.1	7.7	26
III 有効群	14.8	14.8	31.5	29.6	9.3	54
全 体	14.3	17.6	36.3	24.2	7.7	91

$\chi^2=14.03$ df=8 N.S.

(1) 介護に関する専門職ボランティアとしての役割

① 現在の福祉ボランティアへの参加状況
 養成校在学中に福祉ボランティアの経験がある卒業生は、現在、どの程度福祉ボランティアに参加しているのだろうか。そこで、卒業生の現在の福祉ボランティアへの参加状況を示したものが表11である。この表からわかるように、福祉ボランティアの経験がある卒業生のうち、14.3%が「時々参加」しており、4.4%が「よく参加」している。しかし、無効群では参加している者はなく、有効群ほど「よく参加」する傾向がみられる。このことから、在学中の福祉ボランティアの経験に対する有効感覚が、卒業後の福祉ボランティアに対する態度を決定する要因となっていることが理解できる。

② 福祉ボランティアにおける介護職としての専門性の活用

現在も福祉ボランティアに参加している卒業生が、介護職としての専門性を生かしたボランティア活動をしているかどうかを尋ねた結果が表12である。

表12より、データ数としては16名と少ないが、そのうち、「生かされている」と答えた者が31.3%、「少し生かされている」と答えた者が37.5%であり、両者をあわせると7割弱の者が介護職の専門性を生かした福祉ボランティアを今もなお続けているのである。

(2) 施設等におけるボランティア・コーディネーターとしての役割

介護福祉士養成校を卒業した者は、施設等でボランティアの受け入れ側となる。そこで、卒業生が勤務している施設等におけるボランティアの受け入れ状況を調べたところ、福祉ボラン

ティアを経験している卒業生91名中83名(91.2%)の勤務先でボランティアを受け入れていた*7。ここでは、在学中に福祉ボランティアを経験し、かつボランティアを受け入れている施設等に勤務している卒業生の回答のみに限定するため、ボランティアを受け入れていないと回答した6名と無答2名の回答を排除して、分析を行う。

① ボランティアを受け入れる場合の福祉ボランティアの経験の有効性

福祉ボランティアを経験している卒業生のうち9割強の卒業生が勤務する施設等で何らかの機会にボランティアを受け入れている状況の中で、施設側は、ボランティアに対してどのような対応をしているのであろうか。そこで、施設側の一員として卒業生に、ボランティアを受け入れる場合の配慮事項について、5段階尺度(1. そう思わない, 2. あまりそう思わない, 3. どちらともいえない, 4. 少しそう思う; 5. そう思う)で回答してもらった。その結果は表13に示すとおりである*8。

全体的にみれば、「できるだけボランティアが希望する日時に受け入れている」が最も平均得点が高く、ついで「ボランティアと利用者の触れ合いの場を設けている」、「ボランティア活動の前に施設の説明や案内をしている」、「ボランティアの役割分担を明確にしている」、「ボランティアの不安感を軽くするように気を配っている」など、ボランティアに対する施設側の対応はほぼ良好であると卒業生は見ている。しかし、一方で、「ボランティアのために様々な活動内容を用意している」、「ボランティアへの情報提供は広くなされている」、「ボランティアに対して技術指導を行なっている」などについては十分対応し切れていないという見方をしている。

表12 福祉ボランティアにおける介護職としての専門性の活用 (現在参加者のみ)

(%)

	生かされていない	あまり 生かされていない	どちらとも いえない	少し 生かされている	生かされている	合計
I 無効群	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0
II 中間群	0.0	0.0	80.0	20.0	0.0	5
III 有効群	0.0	0.0	9.1	45.5	45.5	11
全 体	0.0	0.0	31.3	37.5	31.3	16

表13 施設側のボランティアの受け入れ体制

	全体 (N=80) Mean (S.D.)	I 無効群 (N=9) Mean (S.D.)	II 中間群 (N=25) Mean (S.D.)	III 有効群 (N=46) Mean (S.D.)	F値	多重比較		
						I-II	II-III	I-III
できるだけボランティアが希望する日時に受け入れている	3.99(1.06)	3.67(1.15)	3.96(1.08)	4.06(1.02)	0.53			
ボランティアと利用者との解れ合いの場を設けている	3.84(1.18)	3.44(1.26)	3.83(1.17)	3.92(1.15)	0.60			
ボランティア活動の前に施設の説明や案内をしている	3.69(1.22)	3.56(1.26)	3.63(1.15)	3.74(1.25)	0.13			
ボランティアの役割分担を明確にしている	3.51(1.15)	3.11(1.20)	3.52(1.24)	3.59(1.07)	0.63			
ボランティアの不安感を軽くするように気を配っている	3.46(1.12)	2.89(1.10)	3.42(1.15)	3.59(1.07)	1.47			
ボランティア活動の内容について前もって説明している	3.36(1.20)	2.44(1.34)	3.67(0.94)	3.38(1.19)	3.61*	**		*
ボランティアの受け入れ人数にみあった活動を準備している	3.35(1.15)	3.25(1.09)	3.33(1.21)	3.38(1.12)	0.05			
ボランティア終了後にボランティアから意見を聞き、受け入れ体制の改善に役立っている	3.33(1.36)	2.78(1.47)	3.33(1.37)	3.43(1.30)	0.85			
ボランティア担当者との連携が十分になされている	3.03(1.06)	2.56(0.83)	3.00(0.83)	3.13(1.16)	1.11			
ボランティアのために様々な活動内容を用意している	2.98(1.14)	2.22(1.03)	3.04(1.10)	3.09(1.13)	2.27			
ボランティアに対して技術指導を行っている	2.83(1.16)	2.33(1.25)	2.79(0.96)	2.94(1.21)	1.02			
ボランティアへの情報提供は広くなされている	2.74(0.90)	2.44(1.17)	2.54(0.96)	2.89(0.78)	1.74			

(注1) Mean は、5段階尺度(1 そう思わない、2 あまりそう思わない、3 どちらともいえない、4 少しそう思う、5 そう思う)から得られた回答の平均得点を示す。

(注2) 一元配置分散分析法ならびに多重比較法(Ryan法)による検定結果については、 $p < 0.05$ …*, $p < 0.01$ …**を付した。

(注3) 無答は、除いて処理した。

これらの項目について、有効群と無効群との回答を比較すると、無効群の方が否定的な回答を示している。特に「ボランティア活動の内容について前もって説明している」という項目については、分散分析と多重比較を施した結果、統計的に有意差が認められた。このことについての自由記述には、「自分がボランティアをしていたとき、とても不安だったので今のボランティアの人達には、十分説明し、わからないことは質問しやすいように努めている」(平成6年度卒、特別養護老人ホーム勤務)といった意見が散見される。このことを加味すれば、自己のボランティア経験を、ボランティアの受け入れに際しての対応に反映させているのではないかと思われる。

② 施設側のボランティアに対するイメージ

次に、卒業生たちに施設側を代表するかたちで、ボランティアに対する印象を5段階尺度(1. そう思わない、2. あまりそう思わない、3. どちらともいえない、4. 少しそう思う、5. そう思う)で尋ねてみた。その結果を示したものが表14である。表14に示す13項目は、上から4項目はボランティアに対する好印象の項目、以下5～13項目はボランティアに対する悪い印象の2種類

から構成されたものである*⁹。全体的な傾向としては、「ボランティアは安心して利用できる」「ボランティアはお客様という印象がある」「ボランティアは利用者を甘やかして後がやりづらい」という項目では、どちらかといえばマイナスの印象を示す回答が得られているが、それ以外の項目ではほぼプラスの印象を示す結果が得られている。

しかし、注目すべき点は、有効群と無効群との平均得点の差にある。すべての項目について、分散分析を施したところ、「ボランティアは役に立つ」「ボランティアを自然に受け入れられる」の各項目では1%水準で、また「ボランティアは、利用者を甘やかして後がやりづらい」では5%水準で有意差が認められた。さらに、これら3項目について、Ryan法による多重比較を行ったところ、有効群と無効群との間に1%水準、あるいは5%水準で有意差が認められた。このことにより、有効群に比べると、無効群、すなわち、在学中の福祉ボランティアの経験が介護福祉職として働いていく上で役に立っていないと判断する卒業生の方が、施設を訪れるボランティアに対してマイナスのイメージを強く保持しており、ボランティアの存在を「迷惑な存在」と見る傾向が強いように推察される。

表14 施設側のボランティアに対するイメージ

	全 体 (N=83) Mean (S.D.)	I 無効群 (N=9) Mean (S.D.)	II 中間群 (N=25) Mean (S.D.)	III 有効群 (N=49) Mean (S.D.)	F 値	多重比較		
						I-II	II-III	I-III
ボランティアは役に立つ	3.70(1.11)	2.44(0.96)	3.84(0.88)	3.86(1.09)	7.43**	**		**
ボランティアを自然に受け入れられる	3.65(1.01)	2.78(1.13)	3.84(0.97)	3.71(0.93)	4.14*	**		*
ボランティアは安心して利用できる	2.81(0.91)	2.22(0.92)	3.04(0.72)	2.80(0.95)	2.76			
ボランティアによってマンネリ化が打破でき、新鮮な気持ちを得られる	3.71(0.96)	3.22(1.03)	3.80(0.85)	3.76(0.98)	1.31			
ボランティアは何でもやってくれる便利な存在である	2.48(1.01)	1.89(1.29)	2.52(0.81)	2.56(1.02)	1.71			
ボランティアはおお客様という印象がある	3.36(1.16)	3.88(0.78)	3.58(1.04)	3.17(1.23)	1.90			
短期間のボランティアは、かえって迷惑である	2.78(1.18)	3.44(1.57)	2.80(0.69)	2.65(1.25)	1.75			
ボランティアに自分の仕事ぶりを見られているようで嫌である	2.37(1.08)	2.22(0.92)	2.48(1.02)	2.33(1.12)	0.24			
ボランティアは、言葉遣いや礼儀作法を身につけていない	2.98(0.96)	3.38(1.22)	2.72(0.87)	3.04(0.92)	1.69			
ボランティアは、専門的な知識や技術がなさすぎる	2.89(0.83)	3.33(1.05)	2.84(0.61)	2.83(0.85)	1.45			
ボランティアは、利用者を理解しようとしな	2.61(1.00)	3.00(1.33)	2.52(0.81)	2.58(1.00)	0.79			
ボランティアは、利用者を甘やかして後がやりづらい	3.00(1.04)	3.78(1.31)	2.64(0.79)	3.04(1.01)	4.32*	**		*
ボランティアが来ると、かえって仕事の負担が増える	2.56(1.03)	3.33(1.15)	2.40(0.94)	2.50(0.98)	3.06			

(注1) Mean は、5段階尺度（1 そう思わない、2 あまりそう思わない、3 どちらともいえない、4 少しそう思う、5 そう思う）から得られた回答の平均得点を示す。

(注2) 一元配置分散分析法ならびに多重比較法（Ryan 法）による検定結果については、 $p < 0.05$ …*、 $p < 0.01$ …**を付した。

(注3) 無答は、除いて処理した。

表15 ボランティア養成に対する寛容性

(%)

	受け入れることに 反対である	どちらかといえば 反対である	どちらとも いえない	どちらかといえば 賛成である	受け入れることに 賛成である	合計
I 無効群	33.3	11.1	22.2	33.3	0.0	9
II 中間群	0.0	20.0	32.0	24.0	24.0	25
III 有効群	2.0	12.2	32.7	36.7	16.3	49
全 体	4.8	14.5	31.3	32.5	16.9	83

$\chi^2 = 21.32$ df = 8 $p < 0.05$

③ ボランティア養成に対する寛容性

さらに、「もし、100人の短期間のボランティアを受け入れる場合、その後ボランティア活動を継続する人が2～3人だったとします。それでもあなたは短期間のボランティアを受け入れることに賛成しますか」という問いを設定し、ボランティアを受け入れる施設の一員として回答を求め、その結果を示したものが表15である。

表15の結果に従えば、83名のうち、「どちらかといえば賛成である」の回答を含めれば「賛成である」と答えた者が49.4%を占める。

さらに、3群を軸にした2次元クロスに χ^2 検定を施したところ、5%水準で有意な差が認められた。無効群は、「受け入れることに反対であ

る」「どちらかといえば反対である」をあわせると44.4%の者が反対しているのに対し、有効群では14.2%にとどまる。また、有効群は、「どちらかといえば賛成である」をあわせると53.0%の者が賛成と答えている。このことから、無効群よりも有効群の方がボランティア養成に対して寛容な姿勢があるといえる。つまり、換言すれば、養成校在学中における福祉ボランティアの経験の有効感覚が、自分たちが施設でボランティアを受け入れる際の寛容な心を育てているのではなかろうか。

以上の結果に、表3の「福祉ボランティアの教育的意義」において、養成校在学中の福祉ボランティアの経験が、「施設でボランティアを受

け入れる時、ボランティアの気持ちが分かる」、
「ボランティアを受け入れる場合の問題点が理解できる」といった項目についても一定の教育的意義が認められたことも加味すると、在学中の福祉ボランティアの有効感覚は、介護福祉士養成に教育的な影響を及ぼすだけでなく、その後、ボランティアを受け入れる施設側になった時、ボランティアに対応する上で求められるボランティア・コーディネーターとしての資質や技術的な能力の形成に関係してくるものと考えられる。

(文責：橋本勇人)

おわりに

筆者らは、今迄のボランティアに関する研究で、ボランティアにはボランティア自身の自己実現に寄与する効果があることを明らかにしてきた⁶⁾。また他方で、高齢社会を迎え、福祉専門職養成にとどまらず、福祉ボランティアの養成も急務となっている。その場合、福祉ボランティアの養成に関して、家庭や地域が果たす役割と共に、小・中・高校、あるいは大学、短期大学、専門学校が果たす役割も大きいと考えられる。特に、介護福祉士養成課程を修了した学生については、卒業後、ボランティアの受け入れ施設でボランティア・コーディネーターになるという特殊性がある。

そこで、本研究では、介護福祉士養成校在学中の有効な福祉ボランティアの経験が、介護福祉士の専門教育を補完するだけでなく、そこで

得られた有効感覚と勤務する施設でボランティアを受け入れる場合のボランティアに対するイメージ・対応・寛容性との間に相関関係があることを明らかにした。また、筆者らは、ボランティアを受け入れる際に、そのボランティアの抱えている不安感を施設職員が軽減ないし除去することが、ボランティアの有効感覚に大きな影響を与えていることを明らかにしてきた⁷⁾。これら2つの知見を関連付けて考察するならば、有効な福祉ボランティアを経験した学生は、その後、現場の施設職員としてボランティアを受け入れる際に、ボランティアに対するより良いイメージと寛容な心で、少しでもボランティアの持つ不安感を軽減ないし除去しようと努める。そして、その暖かい対応が、施設を訪れたボランティアたちに新たな福祉ボランティアに対する有効感覚を生成させることになる。つまり、介護福祉士養成において「学生に有効な福祉ボランティアを経験させること」は、このようなボランティア養成の連鎖の中で、中心的な役割を担う人材を育成していることに等しい。

以上の考察から、図1に示したように、従来の指定科目を中心とした介護福祉士養成を「狭義の」介護福祉士養成と捉えるならば、福祉ボランティア等を含んだ介護福祉士養成を「広義の」介護福祉士養成と捉えることができよう。そして、この広義の介護福祉士養成こそが今日求められているのではなかろうか。

(文責：橋本勇人・別惣淳二・豊山大和)

*1 厚生省関係では、平成5年4月14日に厚生省告示第117号「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な指針」が出され、平成5年7月29日には、中央社会福祉審議会地域福祉専門部会において「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」がまとめられている。同じく平成5年には、全国社会福祉協議会でも「ボランティア活動推進7ヵ年プラン構想」が提案されている。

また、文部省関係では、平成3年4月の中教審答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」や、平成4年7月の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」においても、ボランティア活動の推進やその評価の必要性が述べられている。平成8年4月の生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」では、施設におけるボランティアの参加・支援を促進するための受け入れ体制の整備について提言している。中教審の「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」の第一次答申(平成8年7月)では、地域社会における教育の充実方策の一つとしてボランティア活動の体験や学習の機会の整備などについて提言し、第二次答申(平成9年6月)では、教員養成・研修の段階で介護などのボランティア体験を積むことや、採用にあたってボランティア活動の実績などを評価することを進める

ことを提言した。平成9年6月には、教員免許特例法で、小中学校の教諭の普通免許を受けようとする者は、1週間以上の介護体験等が必要とされた。

さらに、総務庁からは、平成6年3月に意見答申「豊かさとゆとりの時代に向けての青少年育成の基本的方向—青少年期のボランティア活動の促進に向けて」が出され、ボランティア活動の支援環境づくりや参加の場の提供の重要性が指摘されている。

- *2 福祉ボランティアが保母養成に及ぼす影響については、別惣、橋本、豊山¹⁾を参照されたい。
- *3 福祉専門職としての専門性を生かしたボランティアについては、高林²⁾を参照されたい。また、施設等でボランティアの受け入れ側にまわる場合の役割については、巡³⁾を参照されたい。なお、厳密には、ボランティア・アドバイザーの用語の方が適切かもしれないが、本稿では、「施設等における」という限定的な意味で「ボランティア・コーディネーター」の用語を用いた。
- *4 平成元年に卒業生を送り出した養成校は全国で24校25課程と少なく、その卒業生の多くがボランティア活動を経験しているとは限らないので、ボランティア活動の経験者が多いことが把握されているA介護福祉士養成校を調査対象とした。
- *5 調査対象となったA介護福祉士養成校では、在学中に課外活動として(例えば、車椅子ロードレースの係員、障害児・者や老人を対象とした地域の夏祭りでの係員や介助など)、あるいは学校行事の一環として(例えば、ゆうあいピックのボランティアなど)積極的にボランティア活動を奨励している。また、学内の教員からなるボランティア委員会がある。
- *6 「ボランティアに関する科目」は、ボランティアに関する理念や歴史、地域福祉論、具体的なボランティア実践の紹介、ボランティア・コーディネーター論、ボランティア体験の事前指導などといった講義とボランティア体験からなると考えている。また、ボランティア体験といった場合、環境問題、歴史文化の保存など様々なボランティアが考えられるが、介護福祉士養成との関係を考えて場合、福祉ボランティア体験が中心的な位置を占めると思われる。
- *7 卒業生83名の勤務先でのボランティアの受け入れ時期としては、「1年中受け入れている」が59名(71.1%)、「年中行事のみ」が20名(24.1%)、「ボランティア実習のみ」が4名(4.8%)であった。
- *8 福祉ボランティアを経験している卒業生のうち、9割強の卒業生が勤務する施設等でボランティアを受け入れていることと、介護福祉士である本人がこの表13に示す各項目に回答していることをあわせて考えると、介護福祉士が程度の差はあれ、施設等におけるボランティア・コーディネーターとしての役割を果たしていることをあらわしている。
- *9 調査項目の作成にあたっては、妻鹿⁵⁾の内容を一部参照した。

文 献

- 1) 別惣淳二、橋本勇人、豊山大和(1998) 保母養成における福祉ボランティアの教育的意義に関する一考察—卒業生と在学生の意識調査の比較分析—。山陽女子短期大学研究紀要, 24, 123—136.
- 2) 高林澄子(1990) 専門職ボランティアの可能性と課題, 勁草書房, 東京.
- 3) 巡 静一(1996) 実践 ボランティア・コーディネーター, 中央法規出版, 東京.
- 4) 別惣淳二、橋本勇人、豊山大和(1998) 前掲論文, 130—130.
- 5) 妻鹿ふみ子(1997) 福祉現場の職員として。巡 静一、早瀬 昇編, 基礎から学ぶボランティアの理論と実際, 中央法規出版, 東京, pp 156—176.
- 6) 豊山大和、橋本勇人(1996) ボランティア活動に関する一考察。日本福祉教育ボランティア学習学会第2回大会発表抄録, 148—149.
- 7) 橋本勇人、豊山大和(1997) 介護福祉科学生のボランティア活動に関する一考察。日本介護福祉教育学会第3回大会発表抄録, 60—61.